

# 図書館だより



No. 1

平成 29 年 4 月 28 日発行

新学期が始まって、気づけば早1ヶ月。学校生活にも慣れ、生活のリズムが整ってきたころだと思いますが、この後にはゴールデンウィークが待っています。連休は楽しみでもありますが、ここでまた生活のリズムを崩さぬよう過ごしてくださいね。この1ヶ月の疲れを癒して、連休明けも元気に学校生活を送っていきましょう。ゆっくり過ごす読書の時間として本もたくさん借りていってくれたら嬉しいです。先日、2017年本屋大賞が発表され、今年も恩田陸さんの『蜜蜂と遠雷』が本屋大賞に選ばれました。図書館には、大賞をはじめ、過去の受賞本や今年のノミネート本も置いてあります。気になっているものは、どんどん読んでみましょう。



また、連休の間に秋草の可愛い生徒手帳にこれからの予定や計画を書きこんで、自分の目標をはっきりさせるのもよい過ごし方ですね。機能性のある手帳なので、十分に活用してほしいです。

## 2位の作品もおすすめ\*

### 913.6-モ『みかづき』 森 絵都 || 著 集英社

今までの森絵都さんの作品とは違う雰囲気を持った1冊。教育という大きなテーマとならび、大島家というひとつの家族の三代に渡る壮大なドラマが描かれています。戦後、昭和の終わり、平成の始まりと、時代が変われば、教育も、塾の在り方も変わっていきます。「八千代塾」を設立した千明を筆頭に、大島家の人々は「教育とは」、「塾の在り方とは」と、いつもその答えを求め、全力を尽くします。だけど、必死になればなるほど、お互いの心は遠くなってしまい…。ハラハラしてばかりのその先には何度も鼻の奥がツーンとしてしまうラストが待っています。大島家の教育にかける熱い思いと家族を繋ぐ絆をみなさんも存分に感じてみてください。

## 手帳をさらに可愛く\*

### 726-イ『4色ボールペンでかわいい手帳イラスト』 石川 由紀 || 著 東京書店

これから1年間使っていく手帳だからこそ、開く度に楽しい気持ちになりたいもの。でも、いざ書く時には、どんな風にかきこんでいけば、上手く仕上げられるだろうと悩んでしまいますよね。この本では、絵が苦手な人でも書けるイラストの描き方や予定の書きこみ方、付せんのおしゃれな使い方など、可愛いだけでなく、手帳を見やすく、使いやすくしていくためのアレンジのコツがたくさん載っています。コツを掴んできたら、手帳だけでなく、アルバムや趣味のノートなど身の回りの色々なものにも、そのテクニックを活用してみましょう。

## 図書館の開館と貸出について

1年生もだんだんと図書館の利用に慣れてきたでしょうか。3年間を通し、図書館をフル活用してください。ここで、2、3年生も含めた全校生徒のみなさんにもう一度、図書館の開館と貸出について案内します。

開館日: 月曜～土曜 ※ 日・祝日は休館です。

開館時間: 通常 8:50～19:00 (※月曜は11:00より開館)

土曜 8:50～17:00

考査1週間前 8:50～17:15

考査中 8:50～17:00

※学校行事及び長期休暇中の開館に関しては、その都度、お知らせをします。

貸出冊数: 3冊

貸出期間: 新着本 \* 1週間 その他 \* 2週間 (雑誌も最新号以外は貸出可です)

- ★みなさんの持っている生徒証が図書館の利用証となります。この生徒証があると貸出がスムーズに行えますので、用意をお願いします。
- ★記念館前にある返却ポストに返却することも可能です。活用してください。

## マイしおりを作ってみよう

昨年、好評だったしおり制作を今年度もやります!!

制作ブースには、しおり作りに必要な道具を揃えてありますので、手ぶらで気軽に図書館へ作りこぎください。マスキングテープやペーパーチップスの他、今回は和柄の素材を色々用意しましたので、みなさん渾身のマイしおりを作りましょう。作ったしおりは持ち帰って、朝読書の本や図書館で借りた本に使ってください。制作ブースは5月末まで図書館で常設している予定です。



## 手づくりが楽しい\*

### 594-セ『はんなり和コラージュ手づくり帖』 誠文堂新光社

千代紙や和布など、和の素材を使って、さらに小物づくりを楽しみたい! という人におすすめ。和柄のよさを活かしながら、今どき風の可愛い雑貨を作ることができます。

コサージュやかんざし、ポストカードなどは自分用に作るだけでなく、贈り物にするのもおすすめです。個人的には、お守りフレームと箸置きが可愛いなど気になっています。ブックカバーを作り方も載っているので、図書館で作ったしおりに合わせて、ブックカバーを作れば、ますます読書の時間が楽しくなるはず!

## 日本の誇れる文豪たち～絶賛活躍！現代作家編～

図書館だよりでは1年ごとに特集を組んでいます。昨年度は、『ニッポン再発見』と題し、日本全国の魅力を再発見していきましたね。今年度は『日本の誇れる文豪』と題し、日本文学をディープに楽しんできたいと思います。

今回紹介するのは綿矢りささん。2004年、19歳にして芥川賞を受賞したことで一躍有名となります。デビュー作『インストール』で第38回文藝賞を高校在学中に受賞、『蹴りたい背中』で第130回芥川賞を早稲田大学在学中に受賞、次の『かわいそうだね？』で大江健三郎賞を受賞と、順調に作家人生を送られたようにも見える綿矢さん。しかし、芥川賞受賞のプレッシャーで、6年ほどスランプに陥ったといえます。その期間にはショップ店員等のアルバイトを経験しました。今、結婚して母となり、ある意味吹っ切れた境地にあるそうです。余分な力みが抜け、人間の多様性を認められるようになった今だから書ける作品も、注目していきたい作家さんです。



### \*第130回 芥川龍之介賞 ～出だしの一文からすごい～ 913.6-7 『蹴りたい背中』 綿矢りさ || 著 河出書房新社

高校生になった私は、クラスになじめず、浮いた存在となっている。中学時代の友人は、憧れていたという男女混合グループで楽しそうにしている。でも、声をかけられたところで、やっぱり私はその中へ上手く入っていけない。人恋しい気持ちと、寄り添っていけないひねくれた気持ちを抱えて、学校生活を送っている。同じように、クラスで単独行動をしている川。男なのに、なぜか、女性雑誌に釘づけになっている川に声をかけたのがきっかけで、川と不思議な交流が生まれる。好きなものをひたすら追いかける川を見ていると、なぜか私は目が離せなくなる。恋ではない、好意もない、でも川が気になる。川を見ていると湧き起こるこの感情は、一体何なのだろうか。

### \*スランプを抜け出し、生まれた作品 ～さらなる進化の1冊～ 913.6-7 『勝手にふるえてろ』 綿矢りさ || 著 文藝春秋

主人公のヨシカは迷っている。悩んでいる。自分が幸せになれる相手が、どちらなのかを。片想いだった初恋のイチと自分に好意を寄せてくれている職場のニ。イチのことは勝手に見つめていただけだけど、大人になっても忘れられない。だけど、そんな大切なイチだからこそ、万が一、結婚できたとしても、執着しすぎて幸せな結婚にはならないかもしれない。じゃあ、ニを選べばいいのか。いや、イチ以外と結婚するなら、誰であろうと、どうでもいい。新郎の隣に立つことすらせず、頼みごとをつけてしまうだろう。…さあ、どうしよう。  
ふたりの男を天秤にかけ、とにかく大暴走。どんどん加速していくその暴走の末、ヨシカはどちらかを選ぶことができるのだろうか。そして、幸せになることはできるのだろうか。

### \*母となって ～伝わってくるやわらかさは綿矢さんの新天地～ 913.6-7 『私をくいとめて』 綿矢りさ || 著

おひとりさまの生活を気ままに楽しむOLの私。ひとりファミレス、ひとり焼肉もクリアし、次はディズニーランドか、なんて考えている。そんな私に「あなたは人と話すとき、そっけなさすぎるんです」「あなたもいい加減に、もうそろそろ、誰かとお付き合いしてもいいのではないですか」と、あれこれアドバイスをくれ、私にとっての最善を考えてくれる強い存在がいる。それはAだ。Aの声は私にしか聞こえない。だって、Aはもう一人の私なのだから。

自分であって、自分ではない不思議なAに背中を押され、感情が揺れ動かないように、ひとりであることばかりを楽しんでいた私が少しずつ変わっていく。すると次第に、Aと私の関係にも変化が起こり始める。Aはいつまでも私の中にいてくれるのだろうか。

## 図書館司書の「今月はこの本を読みました」

先日、DVDで観ておもしろかった『インフェルノ』(933-7 ダン・ブラウン || 著

角川書店)を原作でも読みました。『ダ・ヴィンチ・コード』、『天使と悪魔』に続く、ラングドン教授シリーズ第3弾です。毎回、危険に巻き込まれるラングドン教授ですが、今回は頭に傷を負い、その間の記憶を失い、目を覚ますとまた早々に命を狙われ…と怒涛のスタートを切っています。追われる原因はスーツの胸ポケットに隠されていた危険物を運搬するバイオチューブにあるよう。なぜこんなものを自分が持っているのか。これが意味するものは何なのか。すべての謎を解くためのキーワードとなっているのは、イタリアの詩人ダンテ・アリギエーリと彼の著作『神曲 地獄篇』謎が1つ1つ解け、全貌が見え始めると、彼は想像を絶する世界規模の恐ろしい計画の攻防劇に巻き込まれているのだと気がつきます。「探して、見つけよ」その言葉のもとに突き進むラングドン教授。目の離せない展開がおもしろく、また、映画とは異なるラストに「こんな展開になるとは」と驚きを感じました。【今井】



『羽生結弦語録』(784-ハ ぴあ) 羽生結弦 || 著 フィギュアスケートがブームです。私だけでなく、日本中がフィギュアスケートで頑張る選手たちを応援しているのではないのでしょうか。突然の引退をブログで発表した浅田真央さんにたいしても、その功績を認め、感謝の気持ちを表明する人ばかりでした。オリンピックメダリストの高橋大輔さんや荒川静香さんも、今のフィギュアスケート全体を盛り立てようとしていますし、彼らにあこがれてスケートを始めた世代も次々に頭角を現し始めています。そして世界フィギュアスケート選手権2017で1位2位を日本勢が占めた男子シングル、羽生結弦さんと宇野昌磨さん。羽生さんはソチオリンピックの金メダリストです。世界王者と呼ばれ、日の丸を背負ってリンクに臨む彼の真摯な姿勢には心を打つものがあります。最大のライバルは自分自身という彼の、他の言葉も知りたくてこの本を読んでみました。そこには見習いたいチャレンジ精神や、感謝する心が彼らしく表現されていました。「僕ひとりでは何もできない」「逆境や自分の弱さが見えた時が好きです」「僕は進化し続けていきたい」「まず“王者になる！”と口に出す。そのあとで自分の言葉に自分自身が追い付けばいいんです」【鈴木】